

ユリの香りの抑制法

「カサブランカ」に代表されるオリエンタル・ハイブリッドのユリは、豪華で美しい大輪の花が特徴ですが、甘く濃厚な芳香を持っているために、飲食店や結婚式などの食事の場などの強い香りを嫌う場では敬遠される傾向があります。そこで、(独)農研機構花き研究所では、外観には影響せず花の香りを抑えることが出来る「香り抑制剤」とその処理方法を開発しましたので、その概要について紹介いたします

☆ 技術の概要

1. 「カサブランカ」の花の香気成分は、イソオイゲノール、ベンジルアルコールなどの芳香族化合物、シス-オシメン、リナロールなどのテルペノイドで構成されています。特徴的な微量成分として、不快臭を有する μ -クレオソール、 μ -クレゾール（芳香族化合物）なども含まれています。
2. 「カサブランカ」のつぼみの切り花を芳香族化合物の生合成阻害剤の一つであるアミノオキシ酢酸（AOA）水溶液に24時間生けることにより、翌日開花した花の香気分量は無処理の約8分の1程度となります。AOA水溶液で処理した花の香気成分は、 μ -クレオソール、 μ -クレゾールなどの芳香族化合物だけでなく、リナロールやシス-オシメンなどのテルペノイドの量も減少します。香気分量が全体的に減少したことから、官能的にも香りは弱くなります。
3. 「カサブランカ」の香り抑制のためのAOA水溶液の濃度は0.1mM程度が適しています。高濃度で処理すると、時間の経過とともに花や茎に褐変を生じます。
4. AOA水溶液を24時間処理した場合の香気分量の抑制効果は、1週間程度継続します。また、AOA水溶液に生けたままとする継続処理の方が抑制効果はより高くなります。

☆ 活用面での留意点

1. 開花後の処理では香り抑制効果は低くなります。つぼみのうちに処理することが望まれます。「カサブランカ」は通常4～5輪花をつけます。適切に処理を行えば2番花以降の花にも同様の効果が得られます。
2. 同じ「カサブランカ」でも、採花時期や産地により香気分量が異なる場合があります。また、「カサブランカ」以外のユリに使用する際は、濃度、処理時間などを事前に検討する必要があります。
3. 詳しいことは、花き研究所花き研究領域（TEL：029-838-6813）へお問い合わせください。

（日本政策金融公庫 農林水産事業本部 テクニカルアドバイザー 袴田勝弘）

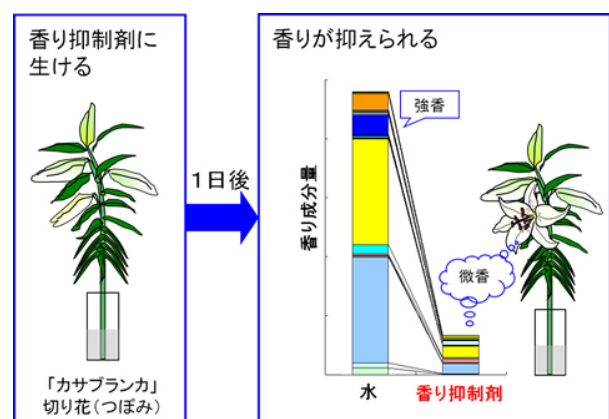


図 香り抑制剤の効果